パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

212 涼しい音色の風鈴（2023 年 11 月 16 日）

1884 年８月９日、飛行船ラ・フランス号が、世界で初めて周回飛行に成功しました。飛行船は、パリ郊外のシャレ・ムードン軍用飛行船研究所の格納庫を出発し、時速 24 キロのスピードで、23 分間、約８キロを飛行して、同じ場所へ戻りました。この格納庫は改装されて、2023 年３月に Hangar Y という文化施設としてオープンしました。

Hangar Y は池の近くに建っており、池の周りに野外展示されているオブジェを見ながら歩くことができます。この中で、私は、クリスチャン・ボルタンスキー（1944-2021）の作品「ANIMITAS」（写真右）に目を惹かれました。この作品を観たときに、日本の風鈴を思い出しました。作品解説のパネルを読むと、やはりボルタンスキーは日本の風鈴から着想を得て作った作品であることがわかりました。

風鈴とは、日本の家の軒下や窓際に吊り下げる小さな鐘です（写真右）。風鈴の内部にある舌（ぜつ）と呼ばれる小さな部品の下には短冊がぶらさがっており、短冊が風に吹かれると舌が鈴に当たってちりんちりんという軽やかな音がします。鈴は、ガラス、鉄、陶器などで作られ、素材によって音が異なります。風鈴は、古くは魔除けの意味があり、湿度が高くて疫病がはやりやすい夏に飾られるようになったと言

われています。その後、ガラスの風鈴が庶民にも広がると、透明なガラスの色と音によって涼しさを感じ、夏に飾るものとして定着したとも考えられています。日本人は、冷房がなかった時代には、目や耳から涼しさを感じて暑さをしのぐ工夫をしてきました。風鈴はその一つで、夏の風物詩となっています。

180個の風鈴が使われてボルタンスキーの作品から、様々な光と音を感じとることができます（写真右は拡大写真）。土にささった細い棒の上部に鉄製の小さな風鈴が吊り下げられています。風が吹くと透明な短冊が光に反射して輝き、風が吹くと風鈴の音が聞こえてきます。フランスでこれほど多くの風鈴を見るとは思っていませんでしたので、嬉しさと驚きを覚えました。

現在の気候では冷房が欠かせず、風鈴の涼やかな音色だけで日本の猛暑を乗り切ることはできません。しかし、風鈴の音色で涼しい気分を味わおうとする習慣は残っています。個人の家庭で風鈴を飾る機会は減りましたが、夏になると全国

各地で多くの風鈴を飾るイベントが開催されています。例えば、兵庫県高岡市では、出石（いずし）城跡の堀には、夏になると地元特産の出石焼の風鈴が飾られます（写真左）。風に吹かれて揺れる小さな風鈴の列を見て、軽やかな風鈴の音を聞くと涼しさを感じます。日本人が風鈴の音を聞くと涼しさを感じるのは脳の錯覚で、風鈴の音がすると風が吹いて涼しくなる、と脳が理解するために涼しさを感じると考えられています。風鈴の音に聞き慣れない人は、風鈴の音を聞いても涼しさを感じにくいものの、癒やしやリラックス効果があると言われています。機会があれば、風鈴の音色を聞いて、音の効果を体験してみてください。